

わたしのメルトダウン

山田まさ子

おひな様を過ぎると、なたねつゆが降る。ひび割れた田畑を通りながら、今年はなたねつゆはなかったのだなど、わたしは思った。

古里にはもう長いこと、寄りついていない。昔はうるさいほど蛙の啼く村であった。

正面にはけむった藍色の山がそびえ、細々と続く小川も畑も、トタン屋根や木造の家々がぼつぼつあるのもそのままなのに、村の半ばが突然、分断されている。高速道路が横たわっているのだ。高速道路は高架橋になっていて、その下の道路は車も人影もみえないのに信号機がついている。どこか他所の街から切りとってきたような巨大スパーが、あかるい色の横文字の看板を掲げて建っている。

イタリア語か何かやろう、独りごちた。八年もひとり暮らしを続けているところなる。

「まるで『舞踏会の手帳』じゃけん」

戻ればひとり言まで土地の言葉になる。『舞踏会の手帳』は年増女が過去の恋人を訪ね歩く白黒映画だが、わたしとはおおいなる隔たりがあった。

年増は同じである。だがわたしが休日街をぶらつけば共産党員が寄ってくる。彼らは何か秘したる悪事の相談のように、さっとわたしの手にチラシを握らせ、そばを離れて様子を見ながう。チラシはみなくてもわかっている。「死ぬ前に借金の相談を！」
「多重債務に苦しむあなたへ」

貰い物のスカートにピンクのキティちゃんのTシャツを着込んで、猫背でとぼとぼと歩く小太りの女。これでフェリーニの「道」の女主人公のように純であればまだ救いがある。チェーホフの「かわいい女」でもいい。「肉体の門」のような凄みもなければ、さりとて「赫い髪の女」みたいに夕暮れにふる雨のしとやかさも無い。

取り柄の食欲にも年とともに陰りがみえてきた。要するにボロ着の上からもはつきりみてとれる大きめの胸と達者な口以外、さして輝きのない女なのである。

相違点ふたつめ。フランス映画の華は女心を手帳の恋人たちとの逢瀬で埋めようとしていたが、こちらの動機は金員であった。

フクシマ3・11の二日後には、わたしは東京から逃げ出していた。放射能ときく

だけで実際に息が苦しくなったが、生活保護の身であれば、南米に高飛びというわけにもいかない。

四国の田舎町にある通称赤のアパートに転がり込み、というのも運のよいことに住んでいた中国人たちが母国に逃げ帰ったために空いていたのだ。コゲのこびりついたフライパンも、バラ模様のカーテンもそのまま残して。

わたしは中国娘の香水のにおいのする蒲団にすっぽりともぐり込んだ。電灯には兎の毛のついた桃色の飾りが吊り下げられ、元の住人の息遣いが、来て数日のわたしなんぞよりずっと色濃くたち込めていた。

生きているひとの部屋に暮らすのは奇妙であった。窓から首を出し、わたしは通りの向こうに彼女の置き去りにされた恋人が来るのではないかとうかがったりした。黒ずんだガス台だの流しにからんだ髪だの彼女の残した生きている活発な痕跡が、わたしをうっとりさせた。もうずっとこんな場所にはいなかった。

八年前、両親が相ついで亡くなってから、わたしはうつ病になった。母の死への自責からであった。精神病院にありがちな大量処方で、ぬいぐるみよりも無能になった。

服用後わずか四日で、五行と文字が読めなくなった。百円玉と一円玉の区別がつかない。お金の数えられなくなったわたしはつり銭で重くなった硬貨入れを首に紐でぶら下げて歩き、スーパーに行くと、ざらっとレジの前にぶちまけた。いるだけ店員さんにとって貰うのだ。

処方治してくれたのは松山の精神科医であった。笠医師は我々患者がため込んだプロバリンやイソミタールを廊下いっぱいに怒声を響かせては取り上げ、不似合いなやさしい声でこうつけ加えた。「もうちよつとの間じゃ。花火みたいなモンじゃきに、ちくつとの間、我慢しちよつたら死ねるぞね」

死にたかったと、母はよくいつていた。昭和八年、母は被差別村に生まれた。実母は五歳で亡くなり、義母は女郎だったひとで旧長浜村でも口をきいてくれる人がいなかった。義母は幼い母にあたった。酔っては殴った。

「おまんは魚の腐った眼をしちよる」

髪をつかんで鏡の前にひきすえた。覚えているだけのおいたちを母はひとことだけで。 「まっ暗やった」

父は二十六歳年上、ハデなアロハシャツにサングラス、セーラーの万年筆で贈り物

の同人誌に詩を添えた。二人目の妻が籍に残り、あちこちに子供のいる新聞ゴロと知ったのは後のことであった。結婚できると男なんぞをたやすく信じた母は、よくある田舎のバカ娘であった。

ただの一度も男に気を許さず、物品を介した交情しか、しかも口先ばかりでそれすら出来るだけ労少なくして、ハートよりも懐の温もりのみに関心を示すわたしは、この点で胸を張るべきかもしれない。進化している、先代よりも。

土佐の高知のはりまや橋で、母は父を昼から夜まで待った。村への最終バスのテールランプを見送った後、歩いて帰ろうとした。裸電球が所々ぶら下がる湿った細長い長浜トンネルを抜け、母は叫んだり笑ったりした。お腹には後に里子に出されるわたしの兄がいた。

母は二十一、二歳と娘盛りを精神病院の鉄格子の中で過ごした。電気ショック療法は、むごいものだった。暴れてもないものに電気をかけた、幾度も。生がけ（無麻酔）であり痛いうえに、記憶を失う。イ・ロ・ハも書けなくなっていた。数年で文字は取り戻したが、ほとんど失われた過去の記憶は戻ってこなかった。

おかあやんの想い出がなんちゃあない、母はそれをまるで自分のせいであるかのようについていた。どうしようもない男と別れられなかったという意味において、母はジェルソミーナに近い。だが父はどんなにロクデナシでも被差別村の出ではなかった。普通の姓をもっていた。

失明して歩けず十一年間寝たきりで他界した父を、かえすがえすも娘の手で殺せなかったのは残念である。悪夢では父が出てくるが、「おとうやんが来る！ はようお金を隠いで」と叫んで眼が覚める。枕の下の財布を確かめ、ぐっしりとした汗を拭いて安堵する。ああ、おとうやんはあの世に行ってくれたと思つて、ほつとする。

この頃では大事な母よりも父の言葉を託宣のように想い出すのである。四万十川の川縁で三歳のわたしはどこかの背広のおじさんのくれた菓子代を素早くひったくった。長く伸びた堤防には牛や馬がいた。パイプをくわえた父は眼に笑いを浮かべていった。「ひったくる奴があるか。あんなときはのう、ちいとは遠慮してみせるもんじゃ」

「メルトダウンの手帳」第一号さんの家は、まだ崩れずに建っていた。「ほうれん草の背が低い。雨が足りん」これは一人言である。

一号さんの母がいたら、集金はもっと賑やかになっていただろう。畑道を突っ切って手押し車を押しつつ「よう来た。たまあるか」と叫ぶのであった。女郎の子で、小学校を四年でやめてコンニャク工場で働いた。「おかやんは赤いべびきずって廊下におったがをいっぺんみたきりじゃ」 役場の書類でも読んであげるといたく感心した顔つきで墓口を開く、いくらかくれるのが常だった。亡くなって数年、節の太い手に墓口にも会えないが、まだ息子がいる。

中学を出てから村の電気修理屋に勤めているよしやんは昼飯どきであろう。小屋、いや家に近づく前に、三十数匹の猫たちの発するツンとする臭いが道ぶちまでこぼれていた。

コンパクトを取り出してお白粉をはたきこむ。中国娘の置き忘れた香水もかけた。
「よしやん、ずずくった深ネギじゃねえ」

糖尿病の深まったよしやんは腹ばかりふくれているが、歯が一本もない口でラーメンをすすっており、肩に乗ってラーメンにちよっかいを出す白猫は片眼がつぶれている。他のも耳が聞こえず逃げもせず道路に寝ていたり、妙な歩き方をする。お世辞にもかわいいとは言いがたい。……が、まるで血統書付きのロシアンブルーをみたように、わたしは感心した声をあげた。「おおの、上等の猫さんじゃ」

天井のクモの巣やらゴミやらさだかでない白っぽい汚れは、レース飾りのように幾重にも糸をひいていた。

よしやんはラーメンを間口に置き、積み上げた生ゴミ袋を踏みこえた。“こえた”というのは、床の中央が十数年前から腐っていて、熊がまるまる落ちるほどの穴がいているからである。

戸のない押入れは新聞をしいた猫の寝床で、どこも新聞紙だらけなのは猫がおしっこをするせいなのである。

「りっぱな猫屋敷じゃねえ」
これ以上、どうほめる？

よしやんは仏壇の引き出しから千円札をとって、またゴミをこえてから差し出した。きつと一万円はあるだろうと、わたしは眼で量った。

数年前に手取り七万八千円の給料だときいたことがある。そんな人から取るのだろうか。

「よしやん、こんなつもりじゃ」

「ちいとばかりじゃき、とつておせ。こんげなとこまで、まさこさんが来てくれて」
「けんど悪いきに」

五十年経てば、人間、ひったくりはしない。おずおずとすまなさそうに受け取って、平らなところがないほどギザギザに爪とがれた柱にもたれた。

昼でも暗い。窓のひとつもない屋敷に裸電球に照らされて反射する瞳、貧相なトラ毛やキジ毛の、野原のごとく部屋をかけ抜ける野蛮な生きものに「元気やねえ」と声をかけ、ラーメンに前足をつつ込むのに「おりコウじゃ」と重ねた。「ほんに猫さんの天国じゃ」

よしやんは女を知らない。若いときからの糖尿で女体は遠くから拝むものであった。それでも猫の尿ばかりのただよう間口に、中国娘の香水がぱつと放たれた。よしやんはどこかぼうつとわたしを見上げた。

「わしは仕事じゃ」

古自転車について、さつき来た畑道を歩く。

歌うように囀るように、わたしは青年のよしやんが棺桶をかつぐときの常連の力持ちであったこと、村祭りで天狗様の傘をもつ係りにされたことなどしあわせで惨めに思えぬ話題を続けた。

別れ道の小川には黄色い菜の花が咲いていた。何年も会わず電話すらせず一万円はあんまりだとわたしは思った。御礼のつもりで自転車にかけていない方の手をひっぱった。乳房に押しあてる。

よしやんの手は木の枝のように固く何の芸もなく動かないのであった。

この人は女の胸にひき寄せられて、撫でたりさすったりするようなアタマすら働かないのであるか。わびしさに息が詰まった。

よしやんは直立不動になり、手ははなれると同時にポケットをまさぐった。しわくちゃの千円札と百円玉をありったけ差し出した。

四万十川がおう。この村ではないのに四万十の風を感じた。ほんのわずかためらってから、わたしは両手でやわらかく受け止めた。